ばけもの

ひとやすみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ばけもの

【Ｎコード】
Ｎ５６０３Ｆ

【作者名】
ひとやすみ

【あらすじ】
古くから、人々は正体の知れないものや、現実には在り得ない特異なものを、化け物とよび、忌み恐れた。しかし、それらはすべて人間が自ら創りだした幻影にすぎない。１７歳の園山阿梨（そのやまあり）は、生まれながらにして、『化け物』を見る能力を持っていた。

『ミチコ夫人の怪』一

おばけなんて　ないさ
おばけなんて　うそさ
ねぼけたひとが　みまちがえたのさ

◆◇◆

その日、村山は朝から悪い予感がしていた。
毎朝欠かさずチェックしている占いは、12星座のうち最下位だったし、その後見た血液型占いでも、O型の看板を背負ったキャラクターは、木登り競争でビリだった。
「うへぇ」
真夜中の学校というのは、どうしてこうも不気味なのだろう。村山は呻いた。警備員として、この高校を巡回するようになって半年が経つが、いまだに慣れない。
かつり、かつり、かつり……
一歩ずつ踏みしめるように歩いていく。懐中電灯で周囲を照らし、ロボットのように教室を見回った。こういうことは機械的にやり過ごすに限る。
と、ふいに村山の足音のリズムが悪くなった。
（薄気味悪いな、あいかわらず）
懐中電灯のライトが照らす先に、肖像画が飾ってある。
描かれているのは中年の女で、胸元に豪奢な真珠のネックレスをしている。開かれたドレスの胸元が艶めかしいが、肌がとても青白く、それが不気味さを強調していた。
なんでも、この学校の卒業生である有名な画家が学校に寄贈した

ものらしい。モデルは当時の校長夫人だという。
そして、この肖像画というのが、おそろしい怪談話が絶えないのであった。
眺めていると女が妖しく笑いかけてきた、ネックレスの真珠が見るたびに増えていく、などなど。生徒ばかりでない、警備員の間でも噂は広まっていた。
村山の先輩も、この学校で巡回するのを嫌がるものだから、いつも一番若い村山に当番を押し付けるのだ。
絵画は生徒がイタズラできないよう、高い位置に飾ってある。絵を眺めていると、まるで『夫人』に見下ろされているようだ。
（こんな絵、外せよ…もう）
村山はいつものように、肖像画をできるだけ視界に入れないよう、その前を通り過ぎようとした。
瞬間、ただならぬ空気に身を硬直させた。
前足は踏み出そうと、爪先が床についている。しかし、後ろ足がぴたりとも動かなかった。懐中電灯を持つ手がカタカタと震えだす。
『いる』
何者かはわからない。
だが、確実に、なにかが、いる――。
「…ひぃ」
つう、と。しめった冷気が村山の首筋をなでた。
額から脂汗が噴出す。
喉からは声にならないうめきが漏れるばかりだ。
視界の端に、肖像画の立派な造りの額縁が見える。首を動かし、斜め後ろを振り向けば、その得体の知れないものの正体がわかるはずだ。
たしかめなければ、と思った。と同時に、恐怖に押しつぶされそうになる。
「…おばけなんて、ないさ……おばけなんて、嘘さ」
無意識に歌いだしていた。

我ながら不思議な行動だった。口元に、幼い子供が強がりするような笑みを浮かべる。そうだ。お化けなんて、いてたまるか。
村山はコリをほぐすように首を回し、肖像画を見上げた。懐中電灯で頭上を照らす。
ゆっくりと息を吐いた。
大丈夫。いつものとおりだ。夫人が微笑んでいる。異変はない。
いや……？　ちがう。違和感がある。なんだろう。
「あ、」
わかった。
「ネックレスだ……ネックレスがなくなっている！…ぐえぇっ」
クイズ番組の回答者のように、勢いよく答えを叫んだ直後、激痛に悲鳴を上げた。
夫人が身に着けていた真珠のネックレスが、村山の首にまとわりつき、締め上げていた。
優雅に輝く大粒の白玉が、凄まじい圧力で首にめり込んでくる。
「…たすけて、くれ」
なぜ自分がこんな目に遭わなければならないのだろう？――しかし、そこまでだった。
村山の思考は、暗い闇に溶けて消えた。

『ミチコ夫人の怪』二

「髪、切ったの？」
短くなった髪束に触れられて、園山阿梨（そのやまあり）は振り向く。
動くたびに、頬に触れていた髪は、肩にも触れなくなっていた。
「どうして切っちゃったの？　あんなに長くてキレイな髪だったのに」
マリエが「なんで」を連発して、まとわりついてくる。阿梨は人差し指で前髪を梳いた。前髪の間からのぞく目が、猫のように大きい。
「阿梨の髪って、厚くて重苦しくて、日本人形って感じで可愛かったのにぃ～」
「…それさ、ほんとに可愛いって思ってた？」
「思ってたー。まあ、短いのも良いけどぉ」
ほにゃり、と微笑む宮ケ島マリエは緩いウェーブのかかったロングヘア。パーマは校則で禁止されているが、本人は天然パーマだと言い張っている。
少年のように短くなった横髪を耳にかけて、阿梨は自嘲する。痩せていて、手足の長い阿梨は、体型も少年のようだった。
（男と間違えられたりして）
「うおっ、園山、髪切ったんか。男みてーだな！」
「ちょっと、何いってんのよ、上條（かみじょう）ぉ！」
……ほら、いわんこっちゃない。
阿梨を指さして笑いながら通り過ぎていく、クラスメイトの上條をマリエが怒鳴りつけている。
「マリエ、いいから」
行こう、と腕を引っ張る。次の時間は理科だ。早く特別教室に移動しなきゃ、遅れてしまう。
「もう、ほんっとアイツって、小学生みたいだよねー。あ、そうい

えば」
「今度はなに？」
マリエは思いついたことを直ぐ口に出さずにはいられない悪癖がある。それこそ小学生みたいだ、と阿梨は思っていたが、もちろん言わない。
興味津々なキラキラした目で、マリエは廊下の突き当たりに飾ってある肖像画を見上げている。
「夜間の警備員が、この絵の女に殺されそうになったんだって。気を失っていたのを、朝になって教頭先生が発見したらしいよ」
「はぁ？」
「ほら、この絵って、いわくつきじゃん。怖い話いっぱい聞くし。そういえば、どの角度から見ても、こっちを睨んでるみたいだよね。マジ怖～い」
「ははっ！　ばっかみてぇ。そんなの信じるなんて」
いつ間にか、上條が背後に立っていた。
「嘘じゃないよ！　警備員さんね、首にネックレスを押し付けられたんだって、ぎゅーって」
「普段から怖い怖いって怯えてるから、そんな夢を見たんだろ」
「むきーっ！　さっきからなんなのよ、アンタは！」
二人が言い争っているのを、阿梨は興味なさそうに眺めていたが、突然何かを思いついたかのように動き出した。
「っ！　うあああ、なんだよっ！？」
上條が悲鳴をあげる。後ろから阿梨が背中にしがみ付いたからだった。
「よしっ、行け！　阿梨っ、上條を攻撃しちゃえー」
「違うって。上條くん、このまま私を肩車してくれない？」
「はえ？」
「サッカー部のキャプテンでしょ。女子ひとりくらい、肩車できないの？」
上條の身長は１８０センチに近い。阿梨を肩車すると、優にニメ

ートルを超えた。
「園山、軽いな。ちゃんと御飯食ってる？」
「うるさい。いいから、もっと前に」
上條は渋々ながら指示に従う。肖像画に近づくと、阿梨は額縁ごと持ち上げて、絵画を外してしまった。さらに肩車から降りて、近くにあった掃除用具箱に肖像画を放り込んでしまう。
「ちょ、ちょっと、阿梨ぃ！？　なにやってんの一体！」
阿梨の唐突で、意味不明な行動に、マリエが混乱して叫んだ。
「いいのいいの。早く行こう、授業遅れちゃう」
呆然としているマリエと上條を置いて、阿梨は何もなかったように、理科室へ向かって歩き出した。

『ミチコ夫人の怪』三

ほとんどの生徒が下校してしまった放課後。
阿梨はあたりを見回して誰もいないことを確認すると、掃除用具箱から肖像画を取り出した。
「…よく見つからなかったな」
なかば呆れたように呟く。
朝は確かに存在していた校長夫人の絵画が見当たらなくなり、いわくつきの肖像画が消えた、と生徒たちは興奮した様子で話題にしていた。
阿梨はスカートから出た膝を床について、額縁のケースのホコリを払う。よくよく絵を眺めると、肖像画の隅には、画家のサインと一緒に『ミチコ』とモデルの名が記されてあった。
「ええと、ミチコさん？　貴女、怖くなんてないよ」
夫人の黒い瞳を真っ直ぐに見つめて、阿梨は絵画に語りかける。
「どこかの誰かが貴女をたまたま恐ろしいと感じた。人間は怪談が好きだから、突拍子もない戯言に影響されて、あっという間にこんなことになってしまった。そうだよね？」
肖像画の夫人はもちろん返事などしない。
「きっと、困ったよね。でも、もう良いのよ……貴女、とてもキレイだと思う。だから、またしばらく、こうして綺麗に微笑んで子供たちを見守っていてくれないかな？」
さらり、と。
阿梨の手が絵を撫でた。埃を払ったわけでない。すでに払っていた――その、ひと欠片も埃がない額縁から――なにかが出てきた。
肖像画から靄のようなものが出て、それが空中に昇っていった。
阿梨は溜息を吐く。暑いわけでもないのに、額に汗が伝っていた。
「手伝おうか？」
「……もう、終わったし」

「違う。その絵、元の位置に戻すんだろ？　ひとりで出来るのかよ」
途中から、誰かに見られているのは気が付いていた。
後ろにいた上條が、ひざまずいて阿梨に肩を差し出す。阿梨は身軽な動きで上條の肩に乗ると、天井に頭がつかないように注意して、絵を元に戻した。
絵画に変化はない。中年の女が描かれた、ごく平凡な肖像画にしか見えなかった。
「ところで、園山」
押し殺したような声で上條が言う。
「なに」
「今、お前の太股が俺の顔に当たってるわけだが、全然モチモチ感がないな。軽いし、薄いし、硬い。正直ガッカリ」
「っ！」
茶色がかった髪の頭を叩き、阿梨は上條の肩から飛び降りる。
「ばかっ、何しに来たのよ！　アンタは」
「痛てて…。たまたま通りすがりに園山を見たからさ。ところでそれ、隠したままにしておいた方が良かったんじゃないの？」
肖像画を指して聞いてくる上條に、阿梨はそっけ無く答えた。
「大丈夫だよ。もう、変な噂も起きないでしょ」
「園山がそうしたんだろ？」
「邪気を払っただけよ。上條くんも言ってたじゃん、『普段から怖い怖いって怯えてるから、そんな夢を見たんだ』って。想像してみて？」
阿梨は廊下の窓に凭れる。窓から、夕焼けに照らされたグラウンドが見えた。
「何百人っていう沢山の生徒たちに、毎日毎日、恐怖の眼差しで見られたら――そうじゃなくても、そうなるしかないじゃない。少しの間、生徒の目に触れないようにしておいただけで、大分毒気が抜けていたよ」
上條が首を傾げる。よくわからない、といった風だ。

「恐ろしいと感じる。そう感じるほどに、妄執が生まれる」
「もうしゅう？」
阿梨は表情を変えずに、一言一言はっきりと発音し、説明する。
「まあ、妄想みたいなものだね。恐怖が大きければ大きいほど、恐ろしい妄想をしてしまう。自分自身で創りだしているんだよ、恐怖を」
「…じゃあ、あの警備員は」
「彼が一番の怖がり屋さんだったって、ことかな。殺されかけたなんてよっぽどだね。まあ、チリも積もれば山となるってことで、大量の妄執をぶつけられると、魂を持たないはずのものが、邪気を帯びるの」
そこで阿梨は僅かに声を低めた。
「そして、人々が妄想したとおりの形（もの）になろうとするんだ。それが、怪奇現象の正体というわけ」
上條はふと肖像画を眺める。
絵の中のミチコ夫人の表情が、心なしか穏やかになったように見えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5603f/

ばけもの

2010年10月28日07時25分発行